

## 6) 放水路（隧道部）

- ①建設年代 明治 39 年（1906 年）2 月～明治 41 年（1908 年）3 月  
②施設概要 山岳トンネル  
延長：264.3m、幅：3.0m、内空高：3.0m、勾配：1／75  
③特徴 間知石練積の矩形坑門

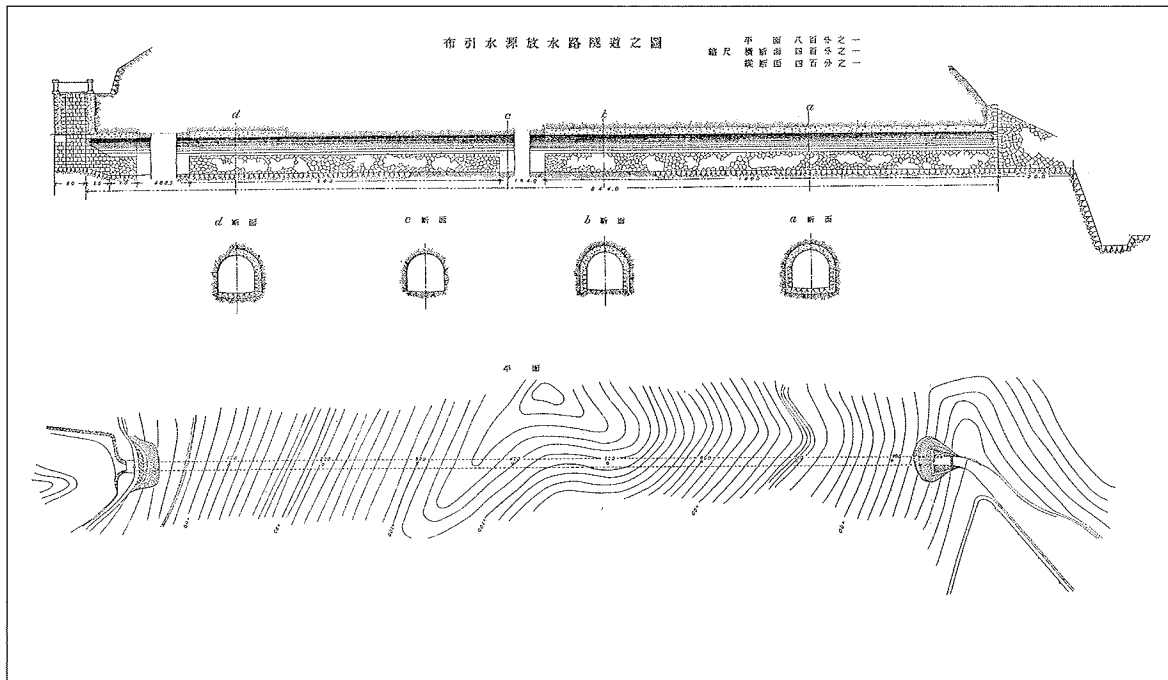


図 3-10 放水路（隧道部）

布引ダムが集水域である生田川流域も含めた六甲山系は荒廃地であったため、ダムへの濁流土砂の流入が予想外に多かったため、放水路（隧道部）を掘削して、濁流を既存の放水路に接続して、ダム下流に放流する工事を明治 39 年に着手した。なお、植林が必要と思われていたが、貯水池の建設計画には組入れられていなかった。生田川上流域で植林作業に着手されたのが、明治 35 年（1902 年）11 月 13 日であった。

建設当時には、流入側坑門（図 3-10 の左側）にはストニー式と呼ばれる開閉装置を備えた鉄ゲート（縦横 2.1m）があったため、洪水時にゲートを揚げて濁水を下流側に放流していた。しかし、貯水量が減少した場合には、ゲートを閉鎖して濁流水もダムに流入させていた。現在もゲート跡の鉄プタが散策路上に見られる。

地山が硬い花崗岩であるため、素堀で施工されているが、一部地山の悪い箇所ではコンクリート（厚さ 30cm）で補強されている。また、側壁及び底面はモルタルを用いて粗石が張られており、区間延長は 72.9m となっている。隧道の勾配は 1／75 であり、従来の放水路（開削部）に接続した箇所（図 3-10 の右側）では約 3.7m の段差が生じている。

神戸市会史（昭和 43 年発行）によると、明治 38 年 12 月に、布引放水トンネルの用地買収の議案が提出され、トンネルの地上部に永久地役権（後に議会で訂正→使用収益並ニ通行ノ権利）を設定することが了承された。そのため、隧道の工事着手が明治 39 年にならざるを得なかったと思われる。